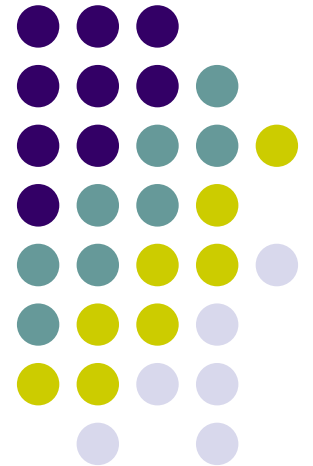


中国西南民族史

10. 南詔国の衰亡と大理国の成立 (9世紀末～10世紀)





蒙氏の權威の相對化

唐との關係が蒙氏の權威の源泉となりえなくなる
(西川における待遇低下・世隆の冊封拒否)

軍事遠征の強行(豊祐・世隆時期)

結果:遠征の失敗?による主戦派の交代
滇池地区の地位上昇 = 蒙氏權力の相對化

別の方法で南詔王の權威維持を画策



新たな権威の源泉を求めて

仏教への傾斜

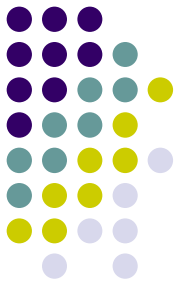
- 雲南への仏教の伝来：上限は不明
- 南詔国後期(隆舜時代以後)におおいに流行
(当時成都で流行の密宗：南伝仏教ではない)
留学生が持ち帰った？
- 多数の仏寺・仏塔の建設

大理崇聖寺三塔





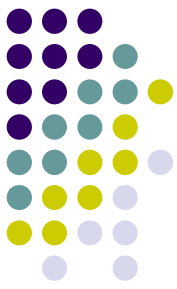
三塔の主塔 (南詔国時代 / 他の二塔は 大理国時代)



大理国時代の菩薩像 (雲南省博物館の展示より)



大理国・虚空藏菩薩銅坐像
Sculpture of Bodhisattva
(937-1253)



『南詔図伝』

- 画卷と文字巻(史料10.1)からなる
- 蒙氏の建国 = 張氏からの権力委譲
という遜位伝承の創成

仏教的色彩が濃厚

末尾に「摩訶羅嵯」隆舜が描かれる

maharaja?



『南詔図伝』

- 写真は李霖燦『南詔大理国新資料的綜合研究』
(台北国立故宮博物院, 1982)などを参照
- 「文字卷」の釈文は林の WEBページ
雲南・東南アジアに関する漢籍史料
<http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/~maruha/kanseki/>
を参照してください



「象徴としての南詔王」？

- 蒙氏が唐からの権威づけを失って以降、実権は楊氏・段氏などの白蛮大姓に移る

南詔王は一種の「統合のシンボル」として機能？

隆舜に関する記述：

「法は畋獵酣飲を好み、国事は大臣に委ぬ」



南詔国の衰亡

- 公主の降嫁：結局実現せず（史料9.21）
唐王朝自体が衰退 権威を付与する能力を次第に失う
- 南詔王の権威の源泉が対唐関係（和・戦いずれにせよ）にある、という性格は南詔国一代を通じて不変

唐が滅びるとき南詔もまた滅びざるをえない

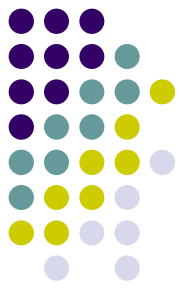


南詔国の滅亡

- 902 漢人系の鄭買嗣(鄭回の子孫)、
舜化貞を殺し国を奪う(史料10.2)

ただし南詔国時代に形成された「クニ」としての
枠組みは残される

異なる原理の王権が必要とされる？



蒙氏を継ぐもの

大長和国 (902 ~ 928)

- 鄭買嗣は鄭回の七世孫。舜化貞を弑殺後自立

914 黎州に侵攻 (史料10.3)

920頃 前蜀政権に遣使 (史料10.4)

923~5 南漢に婚姻を求める (史料10.5)

925~7 後唐、大長和国を招諭 (史料10.6)

- 婚姻政策の継続 / 同等性の主張も変わらず



混乱の時代

925 「東川節度使」(劍川節度?) 楊干貞、
鄭氏政權を打倒、趙善政を立てる

大天興国(928)

- 趙善政「僅か十月」で楊干貞に廃される

大義寧国(929 ~ 37)

- 楊干貞がみずから即位

当時の四川は混乱状態(前蜀 後唐 後蜀)
中原側に史料なし



段氏の台頭

段思平

- 閣羅鳳時代の大軍将 / 清平官段忠国の六世孫
- 楊干貞時代、通海節度使(都督?)となる
通海 = 滇池地区 ~ 安南ルート of 要衝
段氏: 滇池地区で勢力拡大

楊氏と対立を生じる

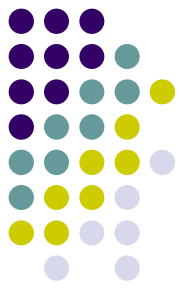
「楊干貞趙善政の位を奪い、(楊)詔の譖りを受け、常に思平を除かんと欲す」(史料10.7)



段思平の起兵

937 弟思良・軍師董迦羅・楊氏の臣高方らと起兵

- 東方黒爨松爨三十七蛮部の兵を借りて石城に会盟、西進して楊干貞を攻める。
- 楊干貞は大理を捨て逃亡
- 同年即位(文武皇帝)、国号を「大理国」、年号を「文徳」とし、大理を首都とする(段思平44歳)



大理国の成立

938 董迦羅を相国、高方を岳侯、爨判を巴甸侯に封じる

- 東方三十七蛮部の徭役を免除
- 楊干貞を許して僧とする

段思平は仏教を尊崇 「建寺鑄仏万尊」

944 段思平没、子の思英継ぐ(文経皇帝)



大理国段氏の王統

- 945 段思平の弟思良、思英を殺して即位
「帝叔思良争い立ち、帝を廃して僧となす。法名は宏修大師。」

「一説に思英素より不肖、思平在りし日、常にこれを廃さんと欲するも果たさず。即位するにいたり、いよいよ淫戯無度、羣臣これを廃して立思良を立つ。」

(史料10.8)

以後第十代の素興まで思良の系統が続く
(北宋の皇統と酷似:何らかの作為?)



大理国の国内体制

前期：基本的に南詔国を継承

- 『長編』(969)や『石城碑』(971)(史料10.9・10)

「演習」「督爽」「久贊」など南詔国時代の官名がそのまま使われている

- 地方統治機構は軍事拠点
次第に封建領主化？



宋朝と大理国

- 967 北宋、四川を統一

「太祖は唐の禍を鑑み、玉斧もて大渡河を画して界となし、この外は吾れの有するにあらずという」(史料10.11)

南宋時代にはすでにこの見方が流布

- 実際には北宋初めには西南民族との接触を試みている(史料10.12～13)
- ただし北辺の情勢などを口実に正式の冊封を避ける態度もある(史料10.14)



宋朝と大理国

- 淳化年間(990-4) **辛怡顯、雲南に使いする**
(史料10.15) 『至道雲南録』(現存せず)
- 熙寧8～9年(1075～6) **雲南馬の入手を試みる**
(史料10.16)

北宋は西夏と戦争状態にあり
西北馬の入手困難

峨眉の進士楊佐が使者として雲南へ(史料10.16)

結局軌道に乗らず、提挙買馬司は1076廃止
(1076に大理国の使節 答礼?)



大理国中期

段氏の権威が次第に失墜

仏教の尊崇ますます厚く、「禅位して僧と」なるものが続出(素隆・素真・思廉・寿輝・正明...)

国政が高氏(建国の功臣高方の子孫)により壟断されるようになる

1094 段正明、高昇泰に位を譲る = 大理国の中絶